

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 1日現在

機関番号：12601

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2010～2011

課題番号：22820013

研究課題名（和文）破壊と創造—歴史的破壊の経験が19世紀フランス文学にもたらした影響の考察

研究課題名（英文）Destruction and Creation:A Study of Influences of Historical Catastrophes on the 19th-century French Literature

研究代表者

数森 寛子 (KAZUMORI HIROKO)

東京大学・大学院総合文化研究科・特任研究員

研究者番号：10588239

研究成果の概要（和文）：本研究は、フランスにおける、ロマン主義時代の作家たちの歴史思想の形成に作用した時代的な要因を考察した。また、作家による破壊をめぐる思索が、文学的創造に対して与えた影響を検証し、19世紀フランス文学における破壊のテーマの重要性を明らかにした。ヴィクトル・ユゴーの作品の読解と分析を通じて、この作家に特有の「創造」と「破壊」の観念を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study examined several historical factors that affected the formation of the historical thought of French Romantic authors. I studied the influences of historical catastrophes on the literary creation in 19th century, and clarified the importance of the destruction theme in French literature in this era. Through the analysis of Victor Hugo's works, I defined the specific idea of the creation-destruction.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,160,000	348,000	1,508,000
2011年度	1,020,000	306,000	1,326,000
年度			
年度			
年度			
総計	2,180,000	354,000	2,834,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：仏文学・19世紀

1. 研究開始当初の背景

本研究は、19世紀フランスの作家の歴史思想の形成過程と作品を創造する過程の双方に、

様々な歴史的破壊の経験に対する思索が重要なモチーフとして関与している点に着目した。そこから、本研究は、文学のあらゆる位相に存在する「破壊」と「創造」という主

題を精緻に分析することを試みた。

2. 研究の目的

本研究は、19世紀フランスの作家たちにおける、歴史思想と芸術的創造との関係を明らかにすること、およびこの時代の文学に通底する「破壊」というテーマの重要性を浮かびあがらせることを目的として行われた。

3. 研究の方法

研究方法は、文献と資料の調査、テキストの読解と分析を主とした。ヴィクトル・ユゴーの作品を主要な分析対象としながら、同時代の他の作家の作品、新聞や雑誌に掲載された記事や論考も調査した。19世紀の資料については、主として、フランス立図書館、パリ第七大学19世紀図書館に保存された、草稿と資料の調査を行った。

本研究の一つの軸となる「歴史的破壊の経験」の表象をめぐる問題を扱った先行研究としては、クロード・ミレ監修の論文集『ヴィクトル・ユゴーと戦争』(*Hugo et la guerre*, Maisonneuve & Larose, 2003)が挙げられる。この研究成果を踏まえながら、他の作家における同主題の研究へと、研究の視野を広げた。

また、同時代の複数の作家に対する分析をまとめる一つの軸として、1804年から1842年までフランスで広く利用された文学の教養書 (Net La Place, *Leçons françaises de littérature et de morale*, 1^{re} éd. 1804)にも注目した。文明の死や廃墟を主題とした文学作品の抜粋を多く引用するこの書物が、19世紀文学における同テーマの流行に大きく関与していたことが推測されたからである。

本研究は、19世紀の多様な文学作品や思想の分析を試みるものであり、考察の対象とする「歴史的破壊の経験」は多岐に渡る。そこで、無尽蔵となりかねないコーパスを絞り込み、研究に明確な方向性を与えるため、次の二つの論点に沿って分析を進めた。

第一に、フランス革命を歴史的断絶と定義する言説の流行と、終末論の流行という二つの現象の相互関係を明らかにすることを試みた。

第二に、19世紀に実際に起こった数々の「破壊」の経験に対する作家たちの思想を整理するため、彼らに共有された「進歩」と「破壊」の関係をめぐるときに焦点を当てて分析を進めた。革命や戦争は、歴史という時間の中における破壊であり、同時に、過去から現在へと連なる人類の一つの物語としての「歴

史」そのものに対する破壊として捉えられる。こうした「破壊」は、この世紀の歴史観を支配する、ある理想的な到達点を前提とすることで成り立つ「進歩」の思想のなかで、いかなる意味を持ちうるのか。この問いめぐる思索と密接に関りながら形成されてゆく作家の歴史思想が、文明と社会に対する作家の位置づけと、歴史に対する「作家の使命」の観念を更新していく過程に注目した。

19世紀における「創造」の観念を検証する上で、本研究は、作家自身がどのような意図と構想の下に作品を創造し、それにいかなる定義を与えているか、という問題の考察に主眼を置いた

4. 研究成果

本研究は、まず文学作品における「破壊」の表象を分析することから出発し、作家の歴史意識を考察した。その結果を踏まえ、本研究はさらに、個々の作家が、自らの文学的「創造」という行為と作家としての自己を、歴史に対して、どのように定義しているのかを考察した。これらの分析を通じて、「破壊」の思想と不可分に結びついた19世紀特有の「創造」の概念を明らかにした。

(1) 19世紀のフランス社会が経験した破壊として、本研究は、フランス革命、七月革命、二月革命、ルイ・ナポレオンによるクーデター、普仏戦争、パリ・コミュン時の市民戦争に注目し、これら諸革命や戦争といった、旧制度の破壊や大規模な都市の破壊をもたらした出来事の経験を、文学がどのような方法で表象したのかを考察した。作家シャトブリアン、ラマルチーヌ、ヴィニー、ユゴー、メリメ、バルザックの文学作品、歴史家ミシュレとキネの作品を中心的な分析対象とし、これらの作家たちが、歴史をいかなるものとして認識し、記述したのかを、「破壊」の表象という視点から明らかにした。

(2) 作家は自らの創造行為と、その結果生み出された書物とを、歴史に対してどのように意味づけたのか。本研究は、歴史による生み出され、そこに避けがたく取り込まれた存在として作家を捉え、自身の属する時代と社会から作家が受ける影響を考察すると同時に、19世紀前半のフランスにおける思潮の中で、「創造」という行為がどのように認識されていたのかを分析した。

(3) 作家による創作の過程と、その作品の定義、作品を通じてなされる作者自身による自我の表現に対し、破壊や廃墟をめぐる思索が与

えた影響を精査した。ユゴーの作品はしばしば巨大な建造物にたとえられる。しかし、作家自身は、文学的創造行為を完成可能な建築に同一化することへの明確な否定としてその作品を提示している。本研究ではその事実を、この作家の諸作品の構想から完成にいたるまでの過程、および、未完の作品群に関してはその執筆が断念されるまでの過程を分析することで明らかにした。

(4) 破壊をめぐる思索が個々の作家の歴史思想の形成過程にどのように関与しているのかを問う一つの手がかりとして、ヴィクトル・ユゴーの作品における、時間と廃墟の観念を分析した。その成果は、論文「ヴィクトル・ユゴーの作品における廃墟と時間の問題」(《 Ruines et la question du temps dans l'œuvre de Victor Hugo 》, Groupe Hugo, <http://groupugo.div.jussieu.fr/Groupugo/doc/10-10-23Kazumori.pdf>) として発表された。

(5) 19 世紀前半のフランス文学における終末論的テーマの流行には、歴史的断絶としてのフランス革命の経験が密接に関連していることに加え、ナポレオン帝国の崩壊による英仏の文化交流の再開が、フランスに大洪水や最後の審判を題材とした作品群がもたらされる重要な契機となっていたことを考察した。

(6) 19 世紀前半のフランスの文学における終末論のテーマの広まりを考察した上で、この流行が、その後半世紀における文学的想像にもたらした影響を分析した。「崇高」の概念と文学によるその表現に着目し、イギリスとフランスのロマン主義の比較研究の視点から、両国における「世界の終焉」を主題とした作品を考察することで、哲学と文学の関係性を探った。その成果は、2011 年 1 月に北京大学で開催された BESETO 国際哲学会議にて発表した(《 Visionary Catastrophe 》, 第五回 BESETO 国際哲学会議、北京大学、2011 年 1 月 9 日)。

(7) ヴィクトル・ユゴーの作品において、歴史的破壊の経験としての諸革命と暴動がどのように表象されているのかを考察した。その上で、こうした破壊の経験が、この作家による「意識」と「無意識」の領域に対する思索へと接続されていることを明らかにした。その成果は、論文「ヴィクトル・ユゴーの作品における意識と無意識」として発表した(「ヴィクトル・ユゴーの作品における意識と無意識」、東京大学大学院総合文化研究科・グローバル COE「共生のための国際哲学教育研究センター」、『精神分析と人文学-問

題としての欲望』、UTCP Booklet 20、2011 年、115-133 頁)。

(8) 作家たちは、歴史的破壊の経験としてのフランス革命をいかに表象したのか。彼らにとって、革命を描くことにはいかなる意味があったのか。カタストロフィを表象するという試みは、果たして成功したといえるのか。これらの問いから出発し、ヴィクトル・ユゴーの小説および詩作品の中で、フランス革命に直接的、間接的に関連する作品を取り上げ、それらを創作過程および出版形態とあわせて精査した。これにより、ユゴーがフランス革命を主要な主題として設定した詩作品群の大半が、当初においては詩集の根幹として構想されているにも関わらず、未完のまま死後出版されるか、作者本人によって分割され、原型を残さない形で別の作品の中に組み込まれていることが明らかになった。この事実は、19 世紀文学におけるカタストロフィの表象可能性をめぐる問題を考察する上での、重要な糸口となるはずである。

(9) 19 世紀に実際に起こった数々の「破壊」の経験に対する作家たちの思想を明確に整理するため、彼らに共有された「進歩」と「破壊」の関係をめぐる問いに焦点を当てた。革命や戦争は、歴史という時間の中における破壊であり、同時に、過去から現在へと連なる人類の一つの物語としての「歴史」そのものに対する破壊として捉えられる。こうした「破壊」は、この世紀の歴史観を支配する、ある理想的な到達点を前提とすることで成り立つ「進歩」の思想のなかで、いかなる意味を持ちえたのか。この問いめぐる思索と密接に関りながら形成されてゆく作家の歴史思想が、文明と社会に対する作家の位置づけと、歴史に対する「作家の使命」の観念を更新していく過程を検証した。

(10) 本研究は、19 世紀フランスの多様な文学作品を、「破壊と創造」という視点から包括的に再考することで、この世紀特有の思想の体系を浮き彫りにすることを試みた。作家による文学作品の創造の過程に、創作とは逆の意味を持つ破壊をめぐる思索が、決定的な力をもって関与している点に着目しながら、考察が進められた。これにより、本研究は、本来対立関係にあるはずの創作と破壊とが一体化することで、19 世紀フランス文学に特有の創造の観念が構築されているという事実を明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

研究者番号：

〔雑誌論文〕（計3件）

①数森寛子、Ruines et la question du temps dans l'œuvre de Victor Hugo、Groupe Hugo (<http://groupugo.div.jussieu.fr/Groupugo/doc/10-10-23Kazumori.pdf>)、査読無し、PDF形式で上記ホームページに掲載、2010年。

②数森寛子、Visionary Catastrophe, Rationality in Human Life, The Proceedings of the 5th BESETO Conference of Philosophy、査読無し、2011年、417-424頁。

③数森寛子、「ヴィクトル・ユゴーの作品における意識と無意識」、査読無し、東京大学大学院総合文化研究科・グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター(UTCP)」、『精神分析と人文学-問題としての欲望』、UTCP Booklet 20、2011年、115-133頁。

〔学会発表〕（計4件）

①数森寛子、Ruines et la question du temps dans l'œuvre de Victor Hugo、Groupe Hugo、パリ第七大学、2010年、10月23日。

②数森寛子、「ヴィクトル・ユゴーの作品における文字」、日本フランス語フランス文学会秋季全国大会、小樽商科大学、2011年10月8日。

③数森寛子、Visionary Catastrophe、第五回 BESETO 国際哲学会議、北京大学、2011年1月9日。

④数森寛子、「ヴィクトル・ユゴーの作品における意識と無意識」、東京大学大学院総合文化研究科・グローバルCOE「共生のための国際哲学教育研究センター(UTCP)」主催 UTCP レクチャー、東京大学駒場キャンパス 2010年6月8日。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

数森 寛子 (KAZUMORI HIROKO)
東京大学・大学院総合文化研究科・特任
研究員
研究者番号：10588239

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()